

本論文は事物知覚と他者知覚を主題として、知覚を身体的行為としてとらえる「エナクティヴ現象学」を展開することを試みたものである。エナクティヴィズムは1991年のフランシスコ・ヴァレラ、エヴァン・トンプソン、エレノア・ロッシュによる著作『身体化された心』によって提示され、その後様々な哲学者・認知科学者たちによって展開されてきた。ヴァレラたちのエナクティヴィズムは現象学の考え方を背景としたものであったが、現象学とエナクティヴィズムの関係はこれまで明確に整理されてきたとは言い難い。本論文のねらいはエナクティヴィズムを現象学的に基礎づけることにより、エナクティヴィズムをより豊かなものとするとともに、現象学的な認知哲学の可能性を示そうとするところにある。本論文の概要は以下の通りである。

本論文は序論と第一部、第二部で構成される。序論では認知を「エナクション」（身体的行為を通じて環境を意味づけること）として捉えるエナクティヴィズムの特徴が、認知科学における古典的な計算論主義やコネクショニズムと対比されながら明確化されている。古典的な計算論主義やコネクショニズムなどのアプローチが表象主義・計算主義・内在主義を特徴とするのに対し、エナクティヴィズムの特徴は認知が「行為志向的」であり、〈頭の中〉での客観的な表象形成に依存するものではないことを主張することにあるとされる。他方でまた、ヴァレラたちのエナクティヴィズムにおいては現象学的反省が不十分であったがために、知覚が行為であることを十分に示せてはいなかったことが指摘され、エナクションの現象学を展開することが不可欠であると主張される。

第一部では、序論での問題提起を受け、事物知覚を対象領域として、エナクションの現象学を展開することが試みられる。第1章ではエナクティヴ・アプローチを展開する代表的な哲学者の1人であるアルヴァ・ノエの議論が批判的に検討されるとともに、メルロ＝ポンティの知覚の現象学を参照しながら、「認知指向的」な事物知覚をエナクションとして理解することが試みられる。第2章では、エナクティヴィズムに対する反例とされる視覚運動失調と視覚失認の検討が行われ、これらの例がエナクティヴ現象学を否定するものではないことが示される。第2章はまた、ルパートが提案した「良い修正主義」と「悪い修正主義」という区分に依拠しながら、認知過程を身体的行為として捉えるエナクティヴィズムの考え方が、知覚経験に対する現象学的反省のみならず、日常的な社会生活の構造に対する反省によっても支持される「良い修正主義」であることを示すことを試みる。第3章では知覚の概念性／非概念性に関わるマクダウェルとドレイファスの論争が検討され、思考をみちびくための知覚（認知志向的な事物知覚）にエナクティヴ・アプローチを適用する可能性について論じられる。

第二部では、第一部の議論を踏まえながら、エナクティヴ現象学を他者知覚に関して展

開することが試みられていく。第4章では、他者知覚に関する近年の認知哲学において議論の中心となってきた「心の理論」説とそれに対する現象学的な「直接知覚説」、エナクティヴィズムの側から提案された「共同的意味生成」に関する議論などが検討される。第5章はフッサールの『デカルト的省察』における議論を手がかりに、他者知覚が成り立つ仕組みを考察するとともに、他者知覚に関する「暗黙的理論説」の検討を行っている。第6章では、他者知覚に冠する「暗黙的シミュレーション説」の批判的な検討が行われ、他者知覚におけるミラーシステムの役割に関して、暗黙的シミュレーション説とは異なった仮説（相互行為指向・二人称モードの他者知覚はミラーシステムの機能に基づいて成り立つという仮説）を提示することが試みられる。第7章では、メルロ＝ポンティを参照しながら他者を経験的主体として経験することの意味の分析が試みられるとともに、エナクティヴ・アプローチで主張される「二人称の根本性」の内実を明らかにすることが試みられている。

以上が本論文の概要である。本論文の意義は、密接な関係がありながらも体系的に整理されることがなかった、知覚に関する現象学的アプローチとエナクティヴ・アプローチの関係を明確化し、エナクティヴ現象学の展開の可能性を明示したことにある。本論文においてエナクティヴ現象学は認知哲学の1つのアプローチとして位置づけられており、その意味においては、現象学的な認知哲学の展開の可能性を示したということもできる。本論文は、エナクティヴ・アプローチおよび事物知覚・他者知覚に関する近年の現象学的議論と関連する神経科学的な研究動向について十分目配りをするとともに、フッサールおよびメルロ＝ポンティの古典的な現象学の議論をも参照することによって、現象学の伝統と、学際的に展開されている近年の現象学的な議論の関係を明確化することに成功している。また、①知覚経験には「行為指向モード」と「認知指向モード」という二つのモードが含まれる、②知覚の基本的なあり方は行為指向的である、③知覚は一種の身体的行為である、という3つの主張をエナクティヴィズムが含んでいることを明確化し、それらの主張が事物知覚と他者知覚においてどのように適用されるのかを明らかにしたことも本論文の大きな成果である。なお本論文の審査において、認知における「表象」の役割が十分に扱われていないのではないかという指摘があった。また、エナクティヴィズムは認知システムを生命システムとしてとらえ、生命と心の連続性を強調するが、その成否については十分説得的な議論が与えられていないのではないかという指摘もあった。しかしこうした問題点は、本論文がエナクティヴ現象学を認知哲学のアプローチとして提示することによって明確化された課題であり、そうした課題が示されたことは本論文の価値を否定するものではなく、むしろその意義を示すものであると言える。本論文は現象学的な認知哲学の展開に大きく貢献するものである。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。